# 祖父恩

鐵鉤居士
題簽

坤

へ5
1267
2

わが国にて花と称するは木にはさくらを
さへいふなれ霞とともに春のはじめの
ゆかりに咲いづる桜は貴とみてなつかしみを
かさねてもなほ我さかしにと称するも宜なるかな
花はむかしよりもろこしの世に嗣木の桜の
めでたき世にかはりていとやく一株の桜を
こそいはひそれにうつろふことありて芦もしく
かやうの花の乃見の花しのはやる我

へ 5 門 1267 2

猶こよなう梅を翫ひんするに増まさる
とし頃ふ者しあらまし名を聞えさせ
那か役名をもみちのくのあれ深くたづね
來るかな遊ひしふもとを淺さはらまし
梅楽年表見てまあ乃記てまみといふへし
のこと毛恃しかは常設としきり　梅房笑る
故何かそのあれ浪遊　右さへつきき賓と
西ますふ中す増りいてこの拝なすてこひ祖父の

追ひ去りまさ東風にあまりし字たかはひ
投乃まゝ挿し飛乗れ花と称へる彼岸の
かそらをしひ足りし侍らくんと祖父の恩乃下
のまゝよと那し宇るんてみ乃恋し顧の果へ
絡らんてゝちと笠阿弥曳乃左角筆の光京と
来のるもおのまゝけ何ふさつまさしまし也あま
幹へ添木をしその御意へしを志そまん　と
わつ楽せし人まふま文　机よ常に坐しけ　とくも

まことめ乃子となまかくりし荒木のおはな
うらはつきをことらんの寡乃ひるま読まぬ
序文れ俳の乃も那りたく仮名めくすみの
かくなりハ古梅園乃名高き墨にも似たりける

河竹其水誌

紀元二千五百四十年夏日　梁中書

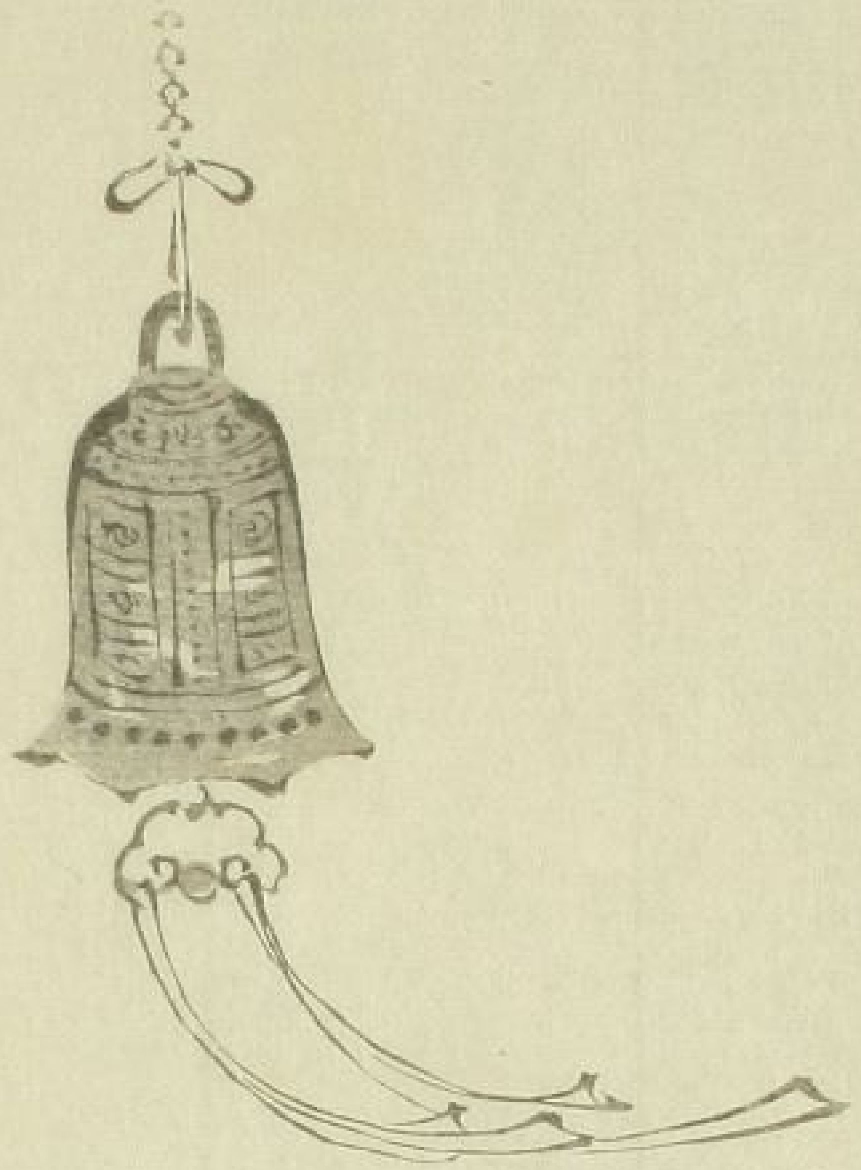
本是霓裳隊裏僊　當場歌舞最爭姸
今朝檀板聲何悽　着得斑衣淚潸然
自家裝束自家情　惆悵春風奏管絃
演到琵琶湯藥劇（琵琶記湯藥一劇爲蔡老皃臨終情甚悽惻）不堪回首憶當年

小詩二章應
尾上梅幸詞友之屬
乘桴散吏初稿

夏懐旧

[illegible]

[illegible]



應無所住而生其心

二峰居士

雪庵

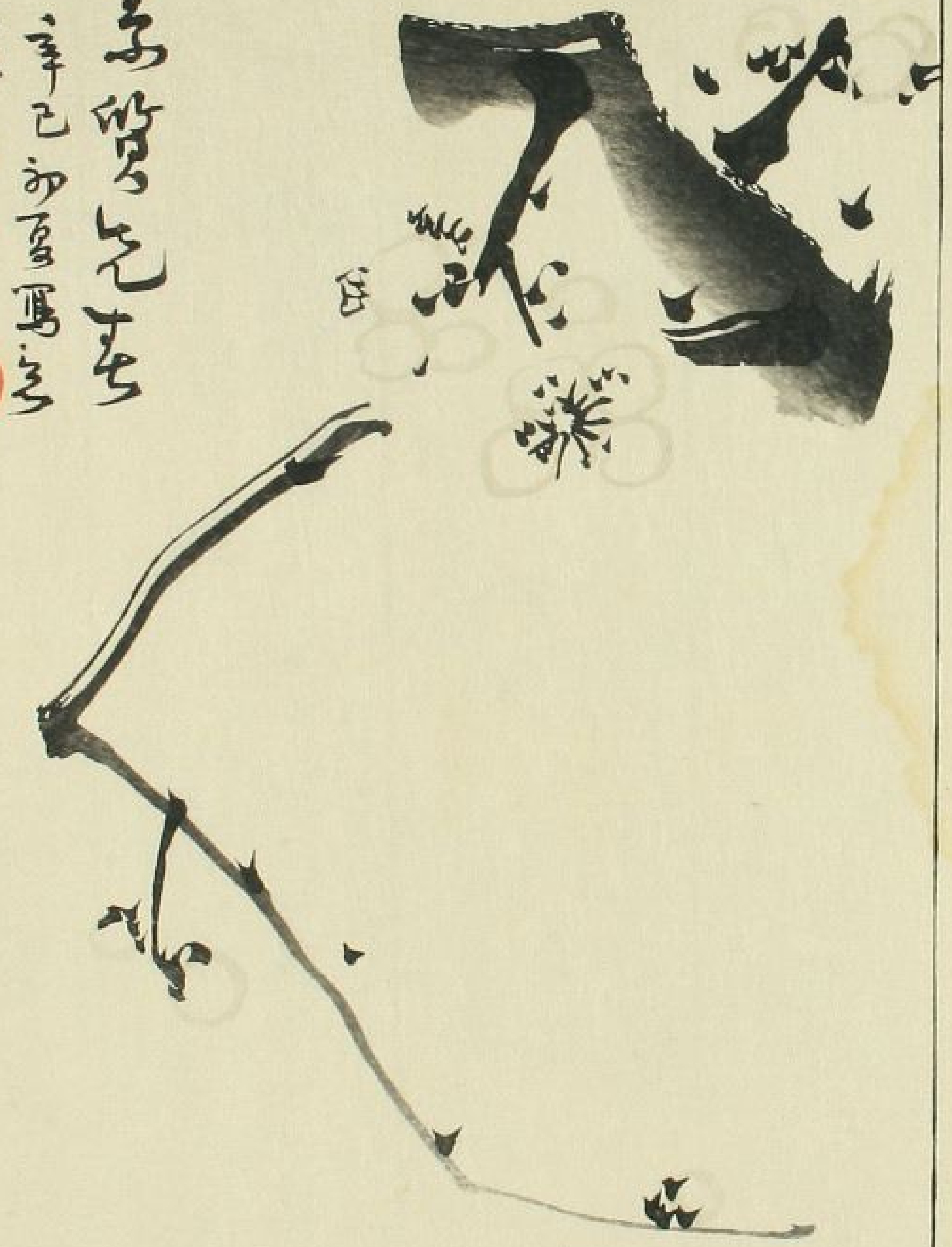
江堤仍野岸寸〻
滿枯荻一事碧
脈綠東君無路
來

松塘釣史

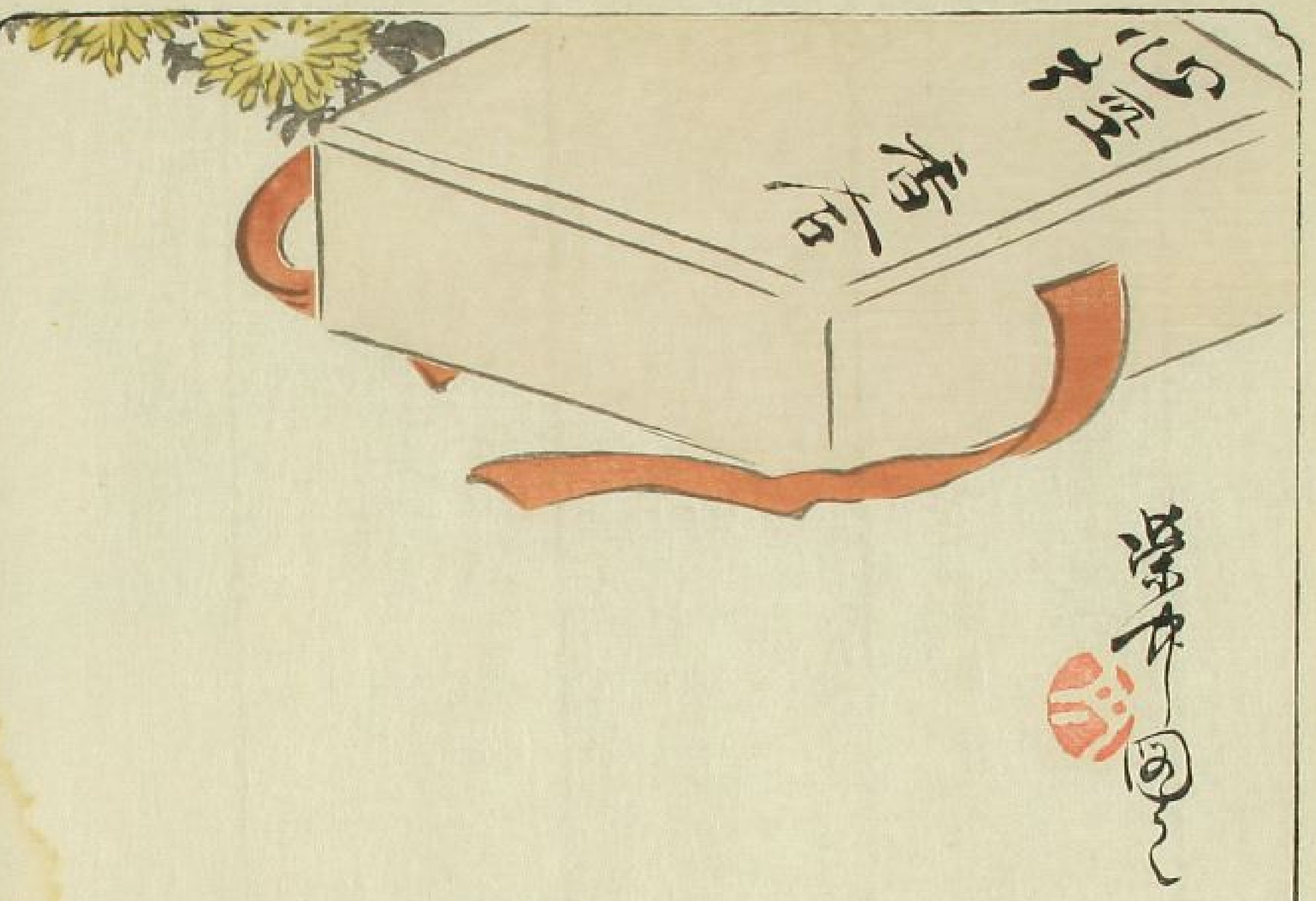
惜別

われもまた … のちのちと … 誰をとこ … 八十叟 梅翁

… むらし 梅 … 蓮 …



寿賀先生
辛巳初夏寫之
草虫庵生為
梅年大人近物



たきもの梅か香
かをるゝなき人ゆかし
乃みち雲流るゝ
ふゝめん　友繁

黒白青黄何揀擇　東西南北
小大縦横功名局促蝸牛形
禍福輪旋飛馬門　銀烏香
殘世幻影未美風過尽窓
暮樽前垂柳　葵暗楳

真武

外画花竹之明

明治辛巳五月書於寄竹庵西窓為楳年雅兄之囑

寄梅老人

梅寿居士自作之肖像之額
書阿添松武

高秋木落洞庭岳
陽城南多晩風蛟龍
夜護玉壇古劍影長
留月明中 万巻

千代見草 一名梅幸年表

梅暦山人筆記

五代目尾上菊五郎ハ十二代目市村羽左衛門（妻ハ三代目尾上菊五郎後梅壽の次女なれ）の次男弘化元甲辰年六月四日の産にて幼名を九郎右衛門と云○嘉永元戊申年十一月〔碁盤忠信雪黒石〕當顔見世番附へ初めて若太夫市村九郎右衛门と名前を出せり○同二己酉年正月〔青砥調〕○同年四月〔恵閠初夏藤〕に鳶の者橘の市松今年六才にて初舞臺を勤めしが栴檀ハ二葉より香ばしくせりふ廻しも開語よく成人の後ハ一廉の役者になるに疑ひなしと皆人言はやせしが果して今一個乃大達者となれり○同年五月〔むらがな盛衰記〕に木曾の公達駒若丸○同年八月〔詞花紅成盛〕に神田の与吉○同

年九月紅成盛後日狂言〔餘波五色花魁香〕近江源氏。鬼一。紙治。など時代世話一幕物の与行○同年十一月又々腰越状。阿波の鳴戸。戻駕の浄瑠理と出せ此二タ暦り役なし○嘉永三庚戌年正月〔澤瀉鎧長者〕に万壽君頼家公○同年三月〔好色嶋田語〕に足利の公達鶴喜代丸○同年五月〔忠臣藏五十三紀〕に塩冶の嫡子為若丸○同年六月忠臣藏後日狂言〔増補四津谷怪談〕前に同じ○同年七月〔菅原傳授手習鑑〕に菅秀才○同年九月操り狂言取交〔月雪花蒔繪見臺〕二代鑑。に秋津嶌一子國松○同年十一月〔碁太平記達升形〕に武隈治郎。藏人一子常若丸。高野物狂ひの場評判よし○嘉永四辛亥年正月〔蓬莱山世嗣曽我〕當春羽左衛門改竹之丞九郎右エ門改羽左衛門〔八才〕にて十三代目太夫元となる曽我に万壽君頼

家。壽狂言に見物左衛門の所作事を勤む○同年二月〔假名手本忠臣藏〕大切浄瑠理〔明烏花濡衣〕に浦里の禿みどり評判よく○同年五月〔戀相撲振袖妹背〕に役なし○同年六月〔一束髪花籠〕竹之丞名残狂言〔一谷嫩軍記〕大切所作事〔松竹梅名残島臺〕に禿ゆかり○同年八月上坂の望を達せず父竹之丞没す○同年九月〔源氏模様娘雛形〕に朝霧の小性薫○同年十一月〔花艶高良重賀紀〕〔娘景清八嶌日記〕に義經の公達今若丸○嘉永五壬子年正月〔里見八犬傳〕浄瑠理〔袖几帳誓別朝妻〕に曽我の箱王丸○同年三月〔隅田川對高賀紋〕に主水娘お徳大切〔京鹿子娘道成寺〕に立波五郎○同年五月〔新造艘奇談〕に役なし○同年七月〔名誉仁政録〕に役なし○同年九月〔金毘羅利生稚鷲〕に源八一子坊太郎大出來

にて評よし○同年十一月（鶊山姫捨松）に役なし○嘉永六癸丑年正月（里見八犬傳）に役なし○同年三月（花吉田岩尾松若）大切所作事（四季寫手向花籠）ふきんちらいの沖居○同年五月（意東繪懸額）（義經千本櫻）道行に鮎賣の若衆○同年九月（假名妃娣娘復讐）ふ吉岡の一子三之丞後日狂言（御所櫻堀川夜討）ふ亀井六郎○嘉永七甲寅年三月（梅柳魁雙紙）淨瑠理（梅艶解仇夢）ふ櫻草賣嶋吉○同年五月（假名手本忠臣藏）（戀女房染分手綱）に志ねん志よの三吉大切淨瑠理（六歌仙容彩）にかくきん坊○同年閏七月（繪本更科譚）ふ更科一子鹿之助○同年九月（八陣守護城）（安達原）（妹背山）道行に事觸橋内大切所作事（拙詫菘種蒔）に太神樂鶴松○同年十月（青砥稿）淨瑠理（邯鄲）に賤の女かむら○安政二乙

卯年三月（鏡山再盛花碑亀）淨瑠理（祝言執愫曳）ふ猿○同年五月（五人男諌膽潔俠）ふ山川屋のでつち千吉○同年六月（機褁目視欹案）ふ奴橘平○同年九月（木下蔭硯伊達染）に清水の兒亀若○今十月二日大地震ふて遂に芝居も類焼なし暮より普請ふ取掛りしが木材拂底の砌故長谷川勘兵衛工夫をかつく亀甲梁と以ふを用ひたり○安政三丙辰年三月（鶴松扇曾我）（夢結蝶鳥追）淨瑠理（姿替霞假宅）ふいやらや悴金子。甚兵衛孫座頭波市。母に盗人の胤と聞き歎く所評判よし○同年四月後日狂言（苅萱道心筑紫轢）ふ重氏一子石童丸○同年七月（義經千本櫻）道行淨瑠理（花市座初音の旅）ふ鮎汲娘かあさ○同年九月（蔦紅葉宇都谷峠）に座頭文弥妹か市○同年十一月（娼女誠長田忠孝）二番目（松

竹梅雪曙）に吉祥院の小僧弁長○安政四丁巳年正月（鼠小紋東
君新形）に蜆賣いけども三吉。鼠小僧の隠れ家へ計らず蜆を賣
に來て姉のおかねが盗人ゆゑ金を貰つて入牢せし難義なるを
嘶も内いけども詞は真情顕はれ見物一同袖を絞り是幼年中
の出世役なり當狂言評判よく正月より四月迄興行○同年五月
（敵討噂古市）は一学悴主税之助。當五月坂東亀蔵烏帽子親とな
りて羽左エ门元服なし主税之助へ剃立髪にて勤む○同年七
月（網模様燈籠菊桐）に七五郎娘按广のおかなみ是又評よし○同
年九月（菅原傳授手習鑑）に苅屋姫○同年十月（伊達競阿國戯場）
二番目大工殺し（糸時雨越路一諷）に巾着切小雀の竹。若衆の巾
着切評判よし是が賊の役の初めなり○同年十一月（寒紅稽古五行寄



本）相中の役者にて直安の興行。忠臣講釈大功記。膝栗毛。歌祭文。
廓文章。に光秀悴重次郎。油屋丁稚久松。藤屋伊左エ门。何れも評
よし○安政五戊午年三月（江戸櫻清水清玄）に庵崎求女。浄瑠理
（忍岡戀曲者）に佐五兵衛悴佐吉○同年五月（假名手本硯高嶌）に
大星力弥○同年七月（繪本大功記）二番目（千両幟）中幕（返魂香）に
土佐修理之助○同年十月（小春宴三組杯觴）白石。鉢の木。幡随長
兵衛。に極樂十三○十一月に至り後日狂言（柳嶌噂錦画）に奴橘平
○安政六己未年二月（小袖曾我薊色縫）に寺小性恋塚求女。百本
杭の殺し評判よし　工藤犬坊丸祐友箱根山對面祐經代り大出
來浄瑠理（蝶今翼輕業）に青柳要之助。輕業の上乗り橘亀吉當狂
言故有りて鬼薊丈ケ預り一夜附に狂言を取替（妹背山婦女庭訓）

役なし○同年四月〔世界祫蝶全小紋〕ふ下駄の市。中幕〔牡丹記念
海老胴〕浄瑠璃〔種全薩埵誓掛額〕に御曹子牛若丸○同年六月直
安の隻与行〔綴合戯場画草紙〕天徳。馬切。十人切。浄瑠理〔影祭俄
俳優〕に天竺徳兵衛。座頭徳市。不破伴左エ门。奴林平。料理人喜助。
仕丁橘又。賤の男竹作。天竺徳兵衛ハ祖父梅壽老の俤なりて木
琴の唄なとゞハ実ふ器用なる事ふて見物も感心致したり○同
年七月〔小幡怪異雨古沼〕に太郎助後家娘おむら。穂積丹三郎○
同年九月〔假名手本忠臣蔵〕ふ本蔵娘小浪浄瑠理〔日月星昼夜織
分〕ふ祭りの手子舞新吉。清盛の小性天女丸○十一月ふ至り赤垣
の別れ。討入。高輪引上ケ迄三幕継足シふ潮田又之丞。一色左京之進
○安政七庚申年正月〔三人吉三廓初買〕ふ木屋の手代十三郎犬



の祟りにて妹と縁を結び後チ和尚吉三ふ殺されるまで師匠
番が米升故申分なし○同年三月〔加賀見山再岩藤〕に左枝犬清。
花房求女。所作事〔拙腕左彫物〕に彫物の獅子の精三人石橋小
團治権十郎ふおとらぬハ感心なり○同年四月〔名髙殿下茶屋
聚〕ふ早瀬源次郎。年号改元ふなり○万延元庚申年七月〔八幡祭
小望月賑〕浄瑠理〔三五月須磨寫繪〕ふ伊豆屋与五郎祭りの練子
吾妻橘治。鳶の者白滝の佐吉。永代橋喧嘩の場ふて赤間源左
衛門との達入せりふハ故人梅壽の声色ゆゑ見物一同大受ゑ
此佐吉ふてめつきりと世評もよく賣出したり今年ハ如何し
てか春より引續た不入ふて流石の小團治も困じ果此七月が
不入ならバ大坂へ登るべしと密かに河竹と約せしも思ひの

外なる大入ゆゑ早魃に雨を得し如く一座挙つて悦びしが悦びあまれば災ひなりと八月末に類焼なしゝが早速普請に取掛り年内荒方出來なし○万延二辛酉年二月〔鶴春土佐画鞘當〕に佐々木桂之助。名古屋下部鹿蔵。狩野雅樂之助。浄瑠理〔魁若木對面契戀春栗餅〕に曾我の十郎祐成栗餅の曲巻杵蔵。年号改元なりて○文久元年辛酉年五月〔害音纏染分〕浄瑠理〔時鳥叟朧夜〕に井筒屋新助。伊達の若徒逸平○同年七月〔東驛いろは日記〕浄瑠理〔夢結露轉寝〕に佐藤与茂七。飴賣渦松。水木辰世実ハ猫石の怪。鳶の者橘の鶴吉。天川屋の伊吾。浄瑠理の飴賣ハ例の本町二丁目の唄を三弦を彈て諷ふのぞ一寸見物の氣を取り當り狂言中での當り又猫寺の老女を若き女で勤めしが是も梅壽の趣き



有りて評よし○同年九月〔本朝廿四孝〕中幕〔鬼一法眼三略巻〕二番目〔名相續信田嫁入〕に長尾三郎景勝。草履取虎蔵実ハ源の牛若丸。奴狐勘平。○同年十一月〔菅原傳授手習鑑〕に舎人櫻丸。判官代照國。櫻丸大出來腹切まで申分なし○文久二壬戌年正月〔戀結團扇伊達翅〕に足利左金吾頼兼。大工かしくの六三実ハ嶋田十三郎。浄瑠理〔六歌仙容彩〕に在原の業平。祇園乃お梶○同年三月〔青砥稿花紅彩画〕中幕〔魁源平躑躅〕二番目〔助六由縁江戸櫻〕青砥稿に信田小太郎実ハ弁天小僧菊之助。早瀬の娘お浪実ハ弁天小僧。此狂言ハ豊國翁が筆を揮ひし錦画の容を種に脚色しと称弁天小僧ハ羽左エ門において附の役柄故ゆすり場から山門の權八もどきの立腹まで申分なき大出来にて取分け白浪

五人男ハ目さきが替ッて評判よく是も一ッの當り狂言なり○
同年五月〔菖蒲合仇討講談〕大切〔猿廻門途の一諷〕ニ石井兵助。道具屋与兵衛。井筒屋傳兵衛○同年八月〔月見曠名画一軸〕に梅咲屋小七。二番目大切亡父竹之丞十三回忌追善所作事〔法四季紙家撝拙〕ニ鞍馬山の小天狗。曽我の十郎祐成。玉菊の亡霊。願人家撝坊。鴛鴦の精。相手ハ名にあふ芝翫ゆゑ何れも出來よく面白き事ニて小天狗の宙乗玉菊の亡霊ハ祖父菊五郎傳来曽我の祐成鴛鴦の精ハ亡父竹之丞の餘風なり分ケて當世をうがつ願人の道樂寺ハ木魚の音に響き氣を取るハ若手の一人也
○同年九月〔むかしがたり盛衰記〕二番目〔花川戸未熟者中〕に船頭又六。白井權八○同年十一月〔碁太平記白石噺〕中幕〔熊野霊驗車街道〕



二番目〔銘仝傳讀切講釋〕白石噺ニ宮城野妹志のぶ跡役なり○
文久三癸亥年二月〔蝶千鳥須磨組討〕二番目〔三題噺高座新作〕に無官の太夫敦盛。熊谷の小次郎直家。祐康の一子箱王丸。大國屋の抱千山。巾着切竹門の虎。當春より辻番附紋番附共市村家橘にて書出しの次へ出し奥座元の居所へハ只一役羽左エ門名前ニて出ル○同年四月〔花卯木伊賀両刀〕ニ誉田大内記。柘榴武助。腹切の大役を能こなさせまして大切浄瑠理〔戀計文珠智恵輪〕に江口乃君。放下師市八○同年六月〔皿屋舗化粧姿見〕二番目〔傘轆轤浮名濡衣〕皿屋舗ニ高岡藏人。こし元お菊。同亡霊。三上の胴六。お菊の役ハ小團治が手を取て教へしゆゑ責らるゝ内の仕打万端米升其侭にて申分なく又胴六の衒り水車の立廻り小

手利ゆゑ評よし○同年八月「竹春虎溪三笑」二番目「菰江戸小腕達引」浄瑠理「女夫團子月能中」薄雪に園部の左エ門。膝栗毛の旅篭屋の娘小町のおつん。二番目の男達曙源太。此源太ハ當り役にて義理ある兄の小團治へ愛想づかしを言ひ真身の姉の菊次郎に位牌で異見を言れる所ハ一日の見所にて真情に迫りて泣ぬ者なし○同年十一月「假名手本忠臣蔵」に桃井若狭之助。こしもとおかる。矢藤与茂七。斧定九郎。九段目の力弥。大切浄瑠理「歳市廓討入」に大工由右エ門子分与吉。義士の討入の有さまを浅草市に准へし笑しき浄瑠理なり○文久四甲子年二月「曽我綉俠御所染」に巴之丞妾時鳥一齋下部切平。雪枝小織之助。大切浄瑠理「柳糸吹矢糸條」に曽我の五郎時致雷。右役の内大出





來ハ巴之丞の妾時鳥にて小團治の百合の方に責殺さるゝ処評判よく時鳥掛といふ根掛流行なせり當春より書出しの座に居たる○年号改元になりて○元治元甲子年八月「一谷凱歌小謡曲」二番目「月出村廿六夜諷」に傾城連実ハ薩摩守忠度。玉屋新兵衛○同十一月「小春穏沖津白浪」に田舎娘おむら実ハ盗賊小狐礼三。八重垣礼三郎実ハ小狐礼三。雪月花三段返しのだんまり田舎娘を引抜き美々しき縫の四天になり六法にて引込しハ花やかなる事なり○元治二乙丑年正月「鶴千歳曽我門松」浄瑠理「一休地獄噺」に不破伴作。修験者金剛院。男達野晒悟助。彦三郎故ありて久しく市村座へ出勤せざるゆゑ浮世戸平と野晒悟助と男達の出入の場へ團蔵の六字南無右エ門が留めに入り吸筒の酒で仲直りを

させる所員連の気に叶ひて評判よし○又々年号改元ありて○
慶應元乙丑年五月（菖蒲太刀對侠客）に楠姑摩姫。妻笠小夜次郎。浄瑠
理（忠臣蔵形容画合）に桃井若狭之助。奴橘平。早野勘平。人形遣ひ西川
伊三郎。種ヶ嶌の六。豊竹渦尾太夫。近年になき大浄瑠理にて何れも
評判能き中にも仕馴ぬ業の人形遣ひと七段目の出語りハ常の
器用と言ひながら急稽古にて感心く○同年八月（娘評判善悪鏡）中
幕（繪本太功記）に明智十次郎。五人女。をぞし屋のお熊。浄瑠理（貸
浴衣汗雷）延壽太夫獨吟に奥女中竹川実ハすぞし屋のおかくま
かういふ役ハ此家の物なる五人の内で一番評よく此時共に評の
よきハ夕立の獨吟にて延壽太夫が大坂で土産に語りし節が残り今
も彼地で語るよし○同年十月（芦屋道満大内鑑）奴与勘平。柏木民



部之助照光。淀川の船頭浪六。大切浄瑠理（滑稽俄安宅新関）に烟
草屋源七。飛脚助平。○慶應二丙寅年二月（櫓太鼓鳴音吉原）浄瑠
理（有姿夢湖水）同二番目に（鼠啼色逢夜）盗賊東國太郎。飛脚渦平。
ごろつき鷲の長吉。三浦屋の新造胡蝶実ハ薄雲の猫の怪此新
造大出来にて鼠と猫のこなしで家根の上乃立廻りが有との事
ゆゑ楽しミしが相手になるべき彦三郎が鼠の吹替を出せしゆゑ
折角の趣向を失ひ残念なる事でありし○同年四月（伊達競阿國戯場）
二番目（蝶々孖梅菊）に荒獅子男之助。鳶嘉藤治。髪結濡髪長五郎。
野手の三実ハ引窓小僧長吉。○同年七月（假名手本忠臣蔵）に桃井若
狭之助。早野勘平。石堂右馬之丞。わいと持橘八。天川屋のでつち伊吾。尾林
平八。佐藤与茂七。○同年十一月（雪武智一座初役）（ひらがな盛衰記）に森

の蘭丸。けいせい梅ヶ枝。無間の鐘の人形振り評よし○慶應三丁卯年
二月〔契情曽我廓亀鑑〕に箱根山女夫杉の精。賤の男湖水の渦松。船頭
大蛇丸の辰。三浦屋の契情岩藤。同新造初菊。手跡指南伊太八実は菴
崎求女。奥州屋の手代礼三郎。大切浄瑠璃〔貸庫魂入替〕に奇妙院
魂入替傳書の精。今年は無人にて若手は家橘田之助のみ故柳島に引
篭りし左團治を再勤させ亀蔵三十郎を後ろ立に名にあふ芝翫彦
三郎栽持の両座を敵に家橘田之助奮發なし岩藤。初菊。伊太八の
三役と一日代りに勤め出情なせし功顕れ両座と同様大入なせしは両人の
手柄なり○同年五月〔善悪両面児手柏〕に妙心寺の僧日章後にごろつき
和尚次郎。葛飾治郎三郎。魚賣新助妹お百後に徳兵衛の妾お百。藝
者小三後に千葉家の妾お秀の方実は姐妃のお百。當狂言は兼てより



田之助が姐妃のお百家橘が和尚次郎を勤むる積りで脚色しを
田之助が足病發し遂に出勤成り兼しゆゑ無拠二役を家橘が獨り
で勤めしかど其甲斐もなく無人ゆゑ中入なりしは残念なり○
同年七月〔新累女千種花嫁〕中幕〔音響音藤戸濤〕に与右エ门娘累。女按
摩かさね実は累の亡霊。浮洲の太郎。大切四代目市村竹之丞百五十
回忌追善所作事上之巻〔諷全法燈籠〕下之巻〔登全色大山〕に見物
左エ门。唐人飴ホニホロ。人形遣ひ。兎。大山参り斧琴の菊松。唐人飴天へ
登ろの宙乗り燈篭抜ケの早替り兎の所作道具替つて惣出の大山
参り勇みの拵へはいつにても評よし○同年八月〔稽古筆七いろは〕に
髙の師直。石屋五郎太実は早野勘平。千嵜弥五郎。中垣源藏。五郎
太は梅壽の倅なれば源藏は又米升の趣きなりて何でも出来る

當用役者実に後世恐るべしく大切の追善の所作ハ當興行へ残りたり○同年十月〔大江政談雪墨附〕中幕〔源平布引滝〕大切〔媼山姥〕観音院の弟子法策後に天一坊。鈴鹿山の魔王坊実ハ伊勢三郎。荻の屋八重桐。天一坊ハ年齢といひ仕打万端大出來なり○慶應四戊辰年三月〔隅田川鶯音曽我〕に天狗小僧霧太郎後にけいせい花子実ハ吉田の松若丸。奥州屋の手代業平礼三。鳶の者水髪伊之助。松若ハはまり役にて申分なしお賤礼三の後日狂言子役とかせに愁歎ハ情に迫りて見物一同袖を濡さぬ者はなし○同年五月〔里見八犬傳〕中幕〔偽織襤褸錦〕二番目〔伊勢音頭戀寝刄〕犬塚信乃戌孝。犬田小文吾悌順。神原佐五郎。福岡貢。十人切ハ血筋ゆゑ自然と梅壽の俤有りて信乃小文吾は増りて評よし○同



年八月伯父亀蔵の進めにより弟竹松へ太夫元と譲り則十四代目市村羽左エ門と改名なし家橘ハ祖父の名を嗣ぎ五代目尾上菊五郎と改名なす〔梅紅葉錦伊達織〕二番目〔芦屋道満大内鑑〕大切浄瑠理〔執集月雪花詠草〕に仁木彈正左衞門直則。道益下男小助。弾正妹八汐。奴与勘平。寂明寺時頼。名古屋山三。何れも評の能き内にも小助ハ祖父の當り狂言改名の光り顕はれて小助ハ一段大出來なり○年号改元有て○明治元戊辰年十月〔假名手本忠臣藏〕中幕〔檀浦兜軍記〕二番目〔猿友門途の一諷〕大切〔其俤花鞘當〕に高の師直。四段目の判官高貞。早野勘平。斧定九郎。岩永左エ門宗連。井筒屋傳兵衛。名古屋山三。○明治二己巳年今年ハ三座割振するに依て中村座へ出勤なし座頭を勤め當正月狂言〔鼠小紋菊重扇

染中幕〔月梅恵景清〕浄瑠理〔魁梅幸色秀姿繪〕に修験者頼豪。菊地兵庫之助実ハ怪鼠の霊。稲葉幸蔵実ハ治郎太夫。賣卜者寺島梅山実ハ治郎太夫景清娘人丸。工藤左エ門祐經。風玉賣ふれくの玉六○同年四月〔百音鳥雨夜蓑笠〕二番目〔忠孝武蔵鐙〕に加古川清十郎。大松屋清七、柴田修理之助勝家。○同年七月〔吉原雀由縁音信〕二番目浄瑠理〔大都會成扇繪合〕に湯灌場小僧吉三。小堀の召仕お杉。非人土左エ門傳吉。金貸座頭徳市。白酒賣新兵衛。髭の意久実ハたいこ持菊八。此ハ八百屋於七湯灌場吉三ハ乾坤房良齋が世話講談の一種にして能人の知る所なり當時かやうな世話物ハ梅幸が得手故に大出来にて評よし○同年十月〔相馬禮音幾久月〕二番目〔契情返魂香〕浄瑠理〔名画揃俄の番附〕に相馬太郎良門。善知鳥安方。安



方の亡霊。猪口の猪口平実ハ相馬太郎良門。狩野雅楽之助。祭の練子八重梅の幸吉。善知鳥の世話場道具替りにて地獄に成り鳥類に責らるゝ所評よし又猪口平の一寸法師ハ米升其侭にて大出来なり○明治三庚午年正月中村座〔秀水仙梅幸曽我〕に大藤内成景実ハ近江の小藤太成家。曽我の十郎祐成。工藤左エ門祐經。髪結和國橋の藤治。當春より守田座二番目へ出勤同月守田座〔館扇曽我訥芝玉〕に弁天小僧菊之助。初めての時より念が入りて見栄へなり○同年三月中村座〔往古摸様扇重縫〕二番目〔梅暦辰巳園〕浄瑠理〔大和谷滝音羽湯〕に男達御所の五郎蔵。巳之丞愛妾時鳥。唐木谷五郎無三四。粂の仙人爪琴屋丹次郎。○同月守田座〔樟紀流花見幕張〕二番目〔家櫻廓掛額〕に花川戸の助六。同年五月中村座〔鬼

薊伊達染締」に極樂寺の所化清心後に鬼薊清吉。仁木弾正直則。同姉八汐。○同月守田座「花菖紀念画雙紙」二番目「時鳥水響音」に道具屋与兵衛実ハまむしの次郎吉此二番目ハ文久年間世に流行せし三題咄のトヽヤの茶碗の筋を其侭世話狂言に脚色しが惜しひかな序幕ぎりにて跡を見せざりし仕舞になり○同年六月同座曽狂言「婷音魁糸紀花輶」に船頭天竺徳兵衛実ハ宗観一子大日丸。座頭徳市実ハ天竺徳兵衛。不破伴左エ門重勝実ハ天竺徳兵衛○同年八月中村座「假名手本忠臣蔵」に高の師直早野勘平。寺岡平右エ門。佐藤与茂七。○同月守田座「狭間軍紀成海録」に郡幸内。水間左京之助。幸内の携同左京之助の討死二役共評よし○同年十月中村座「義經千本櫻」「手向山艶幣」「檀浦兜軍記」浄瑠理「男達六



初雪」に佐藤四郎兵エ忠信。源九郎狐。相撲五郎。舍人櫻丸。男達天人吉三。○同月守田座「群見成戀情紀譚」に庁岡幸左エ門。信濃屋おはん二役共故人の俤ありて評よし○同年十一月中村座「双蝶々曲輪日記」中幕「神免流自在鍋蓋」に放ち駒の長吉○同月守田座「高麗陣帰朝入艪」二番目浄瑠理「鐘音雨古墳」に菴崎求女の吴。寺男寺嶌長吉。神主雨成。○明治四辛未年今年ハ書出しにて中村座のミ出勤正月「新曲輪七種紋日」二番目「本調子糸音色」大切浄瑠理「画音音春錦」に渡邉小左エ門一子四郎三郎。七草四郎利貞。稲倉苗膳之助。鳶の者お祭り佐七。曽我の五郎時致。奴凧。お祭り佐七ハ中分なし浄瑠理の奴凧ハ是迄と違ひ新工夫にて宙乗のまハるくと擴に廻りし放ち業具負連に膽を冷させたり○同年三月「鶴亀曙摸様

初莚〕は三浦荒次郎義澄。召仕お初。大切坂東亀蔵一世一代の所作事〔壽名残嶋臺〕に梅津掃部之助。茂林寺の住僧林鶴。田舎娘おふく実は茂林寺の古狸。此一世一代の所作事へ倅菊之助足利の小性菊若にて初舞臺今年五才なり○同年七月〔義士外傳復讐鑑〕は赤垣源藏。斧定九郎。小の寺十内。大切浄瑠理〔生木偶花洛名所〕に白拍子熊野。氷商人梅吉。○同年九月〔東海奇談音児館〕浄瑠理〔竸天三保松羽衣〕に盗賊の張本二本駄右エ門。天竺阿羅漢那迦犀那尊者。嶋原の傾城薄雲。玉島幸兵衛。山猫の怪。白拍子浮嶋。穀物屋の手代善九郎。月本の家老磯貝民部。當狂言は梅壽が名代の東海道五十三次へ新案を加へし通し狂言其中にも目新らしきは頭巾袴形星の座頭が捕手掛りて頭巾を取ると五十日かづら袴下駄を其侭は大



小を差て浪士の拵へに成り月落烏鳴の唐詩選を幕内で吟声させ花道へ引込これ新趣向にて大受なり○同年十一月〔義經千本櫻〕だんまりの場に金毘羅参り長吉。いがみの權太。九郎判官義経。浄瑠理〔神有月色世話事〕に飴賣かん子○明治五壬申年正月〔梅妃嫉浪花扇記〕二番目〔戀慕相撲春顔觸〕に三浦長門守重成。浪士鵜太郎。船頭鴉の長吉。葛飾十右エ門。実はお坊主幸治。洋学の書生寺嶋松雄。大切所作事〔六歌仙姿拙〕に茶汲み女祇園のお梶。一番目長門守の判元見届けは如何かと思の外近年での大出來二番目の長吉はあまり役ゆゑ申分なし○同年三月〔病櫻志らぬ仇譚〕二番目〔白柄黒手廓達引〕は鳥山大千代後に秋作照忠。花野村の千種実は鳥山秋作。捻華寺の鐘樓守頭念。黒手組花川戸の助六。○同年五月〔濃染菖蒲帷〕中幕〔實説菊夜話〕二番

目〔増補浪花鑑〕に横山大八。淺山の召仕お菊。同お菊の亡靈。一寸德兵衛。三河屋義平次。大切浄瑠璃〔浮廓意善惡〕の西洋の曲馬師スリヱ。目新しく評判よし○同年七月〔源平魁莊士〕二番目〔於岩稲荷験玉櫛〕に源九郎義經。小間物屋与七実は佐藤与茂七。伊右エ門女房お岩。小佛小平。お岩の亡靈。大切浄瑠理〔夕納涼見立錦繪〕に草苅小文太。四谷怪談は祖父菊五郎が初めて勤めしより五十年に當りまた四代目菊五郎のしうど十三回忌ゆゑ合せて追善狂言に右の三役を勤めしが仕掛物迄念が入りお家の物とて申分なし○同年九月〔鷲淵山鬼若物語〕二番目〔幸后月松影〕に奴智恵内実は吉岡書三太。鑄掛屋松五郎後に盗人いなけ松。大切浄瑠理〔積戀雪關扉〕に墨染櫻の精。いなけ松の腹切は前ま米升が只二日勤めしぎり故



目新しく殊に道具の好みの能いので一しほ見物が感心なしたり○明治六癸酉年再び座頭を勤め二月中村座〔御代春陽暦曾我〕中幕〔岸姫松轡鑑〕二番目〔俠客姿錦繪〕に安倍の仲麿。朝比奈の三郎義秀。閑坊傳吉。大切浄瑠理〔花對俄曲搗〕に道成寺のワキ師梅之進。黄金餅屋杵藏。今年午前十時迄村山座へ出勤なす事に極り同年三月村山座〔太鞁音智勇三略〕に鳴瀬東藏正貞。權之助の鳥井と果し合の出合は見物片唾を呑んで悦び朝三立目の初まる頃より土間棧鋪共いつもおいに成り世評酒井の太鞁と共に鳴響いて大入なり○同年四月中村座〔梅柳櫻幸染〕に鳥井又助。局岩藤の亡魂。家老長谷部帯刀。大切浄瑠理〔月雪花色の姿繪〕に猟人玉藏。岩藤の蕪生又助の腹切先人にまさらぬは手柄なり○同年五月

村山座〔梅浪花真田軍配〕ニ木村長門守重成。權之助の片桐との留別ハ殊の外評判よし○同年六月中村座〔花軍扇繪合〕二番目〔梅雨小袖昔八丈〕ニ上嶋主水実ハ大澤傳八郎。髪結新三。大切〔左手美翫誉影物〕に郵便の配達音吉。上島の鎗の試合と流行の撃劍會に准へしハ見物の氣をとりたり又二番目乃白子屋ハ前ニも云ひし良齋の講談ニて仲藏の家主との出合ハ実ニ狂言とハ思はれバ幾度見ても倦ざる程の出來なり○同年九月村山座〔増補桃山譚〕〔奥州安達原〕二番目〔尾花比翼碑〕ニ寺西閑心実ハ本庄助市。大切ニ十一代目市村羽左衞門五十回忌十二代目市村竹之丞廿三回忌正當ニ付家橘と両人ニて追善を勤む浄瑠理〔花艶法音樂〕ニ修驗者大藤内。大山の雷。人形ぢや菊川五郎三郎。仕丁五郎又。此浄瑠



理中ニて見物の目を驚かせしハ今年六才なる悴菊之助が子雷りを勤め菊五郎と共ニ宙乗りを為したり○同年十月中村座〔雛誓亀山新聞〕中幕〔艶山錦木下〕大切浄瑠理〔來宵蜘蛛線〕亀山ゑ小天狗傳快実ハ盗賊壬生の小猿。赤堀水右エ門。湯灌場買あんおう八郎兵衛。武井文藏。中幕大切ハ役なし○同年十一月村山座〔忠臣いろは實記〕ニ清水一学。大切浄瑠理〔廓文章〕に扇屋夕霧。義士銘々傳の中へ高の方の狂言ゆゑ目前きゞ替ッて評よし○明治七甲戌年今年より守田座へ出勤三月〔連歌花二見文臺〕〔群入田鶴病魁菊〕に秩父の庄司重忠。男達野晒悟助大切浄瑠理〔廿三回笹画双紙〕ニ蒸人張飛。廐別當妻の音助。○同年五月〔入間舘劇場繪本〕二番目〔新板色讀販〕ニ召仕お初。油屋娘お染。番頭善六。奇麗なお染ニ引替て番

頭の笑しさは案外の大出来に見物一同に悦びましたり○同年七月「里見八犬傳」中幕「義經腰越状」に犬塚信乃。房八女房お縫。犬川荘助。源の義經。二番目「繰返開化婦見月」に沓米屋赤米仙右エ門。辻道具屋天ぷら銀次。此二番目の三人片輪は當春狂言に仕組みし所都合ありて明智と替り再び七月狂言に菊五郎が勤めしなり天ぷら銀次はいふ迄もなく仙右エ門が目くらとなり先非を悔し按摩の世話場貧苦に迫りし艱難のうち別れし悴の跡を追ひ尋ね行しステーション發車の跡で逢ふ事ならぬせつなさは仕うちは米升此方からいふ役は限り升○同年十月「宇都宮紅葉釣衾」中幕「一谷凱歌小謡曲」「檀浦兜軍記」に松平越中守。大工与四郎。江口の傾城連太夫実は薩摩守忠度。岩永左エ門宗連。大切浄瑠理「壽



うつぼ猿」に女大名園菊。宇都宮の与四郎は大出來にて評よし○十一月に至り凱歌小謡と兜軍記を預り「福在原系圖」「白浪五人男」を出し一番目と大切を残し十一月狂言に換たり五人男に弁天小僧菊之助いつもながら申分なし○明治八乙亥年今年守田座會社を組みて座名を新富座と更一月狂言「扇音音大岡政談」二番目「梅鐘田大力巷説」に感應院の弟子法沢後に億川天一坊。平石治右衛門。魚屋伊之吉。大切浄瑠理「四民姿錦繪」に額面画抜ケの植木賣○ゝ大岡政談は名高き神田伯山生が年頃讀し講談を狂言に脚色し故殊の外評判よく近年稀なる大入なりし○同年三月「天満宮國字揮額」に早野勘平。判官代照國。舎人櫻丸。春藤玄蕃。松王女房千代。ありしもとおかる。大切浄瑠理「日待遊月夜芝居」に夜這星。百姓

草分五右エ門。玉藻の前乃飛去りより本家と稱へる音羽屋の音に響きし宙乗りも其名に恥ぢず梅幸は祖父より遥に勝りたり○同年六月（明治年間東日記）二番目（けいせい阿波鳴戸）東日記に脱走の士寅伴五郎。松屋の手代幸七実は掛川の非人幸十郎伴五郎が召捕になる所は當世を穿ち評よし○同年七月（復讐殿下茶屋聚）中幕（太平記曦鎧）大切浄瑠理（道成寺真似三面）殿下茶屋に安達元右エ門。京屋手代万助。同年十月（筑紫巷談浪白縫）に紅陽院安養。同亡霊。青柳主水。庄屋幸十郎。二番目（双蝶々曲輪日記）に役なし一番目の四幕目紅葉の間にて彦三郎の豊後と菊五郎の主水が闇討にせんと切て掛り両人闇がりの立廻りより異見の件は一日の眼目にして見る人誉ぬ者はなし○同年十一月



（初深雪佐野鉢木）二番目（夜講釋勢力譚話）に袴垂保輔。馬士小佛藤六。修験者奇妙院実は野狐勘次○明治九丙子年一月（善悪両輪妙々車）に度九郎女房荒妙。旅商人師屋幸七実は船越主水。兇子魔度六後に海賊魔度六。新聞講談師梅龍。四役共大出來にて評判の能き其中にも梅龍の講談は彼南龍生がのんくの口調をそつくり真似られしは急稽古とは思はれず実に感心の至りなり大切浄瑠理（六歌仙名家姿画）に役なし○同年三月（川中嶋東錦繪）二番目（昔風俗替新兵衛）に山本勘助入道道鬼齋。古鉄買七兵衛実は駒沢七郎忠友。鵜飼九十郎。一番目の勘助の討死の場は芳年生が武者繪と共に似寫せし拵へ見物乃目を悦ばせ當時若手の人気取なり○同年六月（早苗鳥伊達聞書）に庁岡小十郎。神並三左エ門

実ハ角力取鳴神峯右エ門。茶道珍賀。大切浄瑠理〔三社祭禮巳提灯〕に百人藝音吉。一番目の三左エ門ハ小兵なれども其以前角力取で有らしといふたなしの仕打で見へしハ感心當狂言ハ一座の評能引續て大入なり○同年九月〔音響千成瓢〕二番目〔出世娘瓢簪〕當狂言旅行にて出勤なし○同年十一月〔天草日誌劇新聞〕に渡邉四郎後に天草四郎時貞。楢島甲斐守。山田右衛門。何れも評よし今月末ニ惜むべし祝融子の為に灰燼となり暫く芝居も休業ニ僕も又所用ありて梅に因みの浪花へ趣き假ニ彼地へト居せし故筆記の筆を止めしなり

追加　河竹其水記

○明治十丁丑年本普請建築中更に同所四丁目において仮普



請にて興行則四月開場の初狂言〔新舞臺恩恵景清〕中幕〔近江源氏先陣館〕に注進の軍兵音平。二番目〔冨士額男女繁山〕浄瑠理〔夕立墳春電〕に書生妻木繁実ハ左膳娘おたけ後に神保妾おたけ大切所作事〔鈴音獅子翫〕に操り三番叟。新聞賣風鈴の音。二番目の妻木繁ハ書生姿も実ハ女に何所やらやさしひ所が有て龙園治の人力車夫に女と知らせて是非なくも其身をまかせ宿屋の場で達摩合羽の裏乃赤きを皺の色氣にまぎらせしハ見功者も感服なしたり○同年六月〔一谷嫩軍記〕に無官の太夫敦盛。熊谷小次郎直家白毫の弥陀六実ハ弥平兵衛宗清中幕〔敵討繿縷錦〕二番目〔勧善懲惡孝子誉〕に紙屑買福住善吉。寫真師北庭筑波。此福住善吉ハ親甚兵衛の罪に代り遂に横濱の懲役人となり外役先

にて我子に逢ひ種々艱難の噺を聞泪にむせぶ親子の真情拽舗も土間も男女の別なく袖を濡さぬ者もなき程近年になき大出来なり○同年八月〔三幅對文武揃物〕小野道風 石切梶原 二番目〔二度曠着昔八丈〕に髪結新三。當狂言ハ大暑の砌ゆゑ直下ケにて與行○同年十二月〔黄門記童幼講釋〕に稲葉石見守。舩頭河童の吉藏。藤井紋太夫。中間小稲葉の音藏。河童の吉藏が詮義に从ひ我悪事を白状せず舌を喰切ッて死せし所是迄になき形なかなかさも有るべしと思はれ又藤井紋太夫が能の囃子を鳴物まねひ仕舞の振の立廻りハ相手の伯父が仲藏ゆゑ呼吸が合て面白く後先非を悔悟なし陰腹を切て鏡の間へ出テ水府公に見顕ハされ手討になる件迄團十郎と二人りの出合一日の内の見所なり大切所作事



〔街明治世賑〕に鍛の連中菊松。當狂言ハ何れも評よくされバ月迫の年の暮に常に変らぬ大入なり○明治十一戊寅一月〔児模様曽我館染〕に鬼王新左エ門〔鹿児島だんまり〕に無名の士族〔黄門記童幼講釈〕に藤井紋太夫大切浄瑠理〔柳風吹矢の糸條〕に三途川の脱衣婆。甲子の大黒天鹿児嶋のだんまりハ次狂言の下染めゆゑ唯其姿を見せしのミなり○同年二月〔西南雲晴朝東風〕に簑原國元。研師小川宗治。澤元の妻お才。倉田新八郎。四役の内簑原が戦争の場ハ分て評よく兵隊の指麾に勇氣を見せ数發の彈丸に身を討れ落馬なして西條や武ノ上に面會なし痛手に屈せぬ幕切迄十指の指され所にて是も一場の呼物となり大切浄瑠理〔是珍聞猫根津美〕に九州の士族津々木段平 実ハ噺家三遊亭圓幸噺家

の九州詞くやくハ大受なく古めかしき笑しき出顔の姿が新らしく以ても大當り。○旧地へ本普請出來ヽ付同年六月七日開場式を行ふ何れも小禮服を着し舞臺中央なく團十郎ヽ續き座主守田勘弥ふ代り開場式の祝詞を讀ミ跡吉例式三番元禄踊り三人石橋ゐ三番叟に猿樂師なり○同月〔松栄千代田神徳〕ふ木下藤吉後ミ羽柴筑前守秀吉。鳥取半藏。柏原小平太恭政。野沢弥十郎大切所作事〔牡丹蝶扇彩〕ふ猿樂師寺嶋主殿。元禄踊りハ菱川風の古風な姿が目新らしく三人石橋ハ金色輝く能衣裳ゆゑ目ざましく立派なり○同年八月〔舞臺明治世夜劇〕八犬傳に皿屋鋪太田新六郎助友。青山の召仕お菊。同亡灵。早川主水実ハ寺嶋三治。皿屋鋪ハ三度目ゐゑ年功積ミて以前ゐまさまり○同年十月



〔日月星享和政談〕中幕〔二張弓千種重藤〕大切浄瑠理〔女夫同士意裏表〕享和政談ふ旅役者宮川牛之助後ミ延妙院日當非人小栗の馬吉。日當も大出來なれど亦て馬吉ハ一日の内同じ様な舞台乃場が二三度あるをおとぐく摸様を替て致せしハ世話ふかけてハ小栗ま縁ある鬼鹿毛の鬼とのふべし○同年十一月夜芝居〔假名手本忠臣藏〕毎日替りに足利直義公。高の師直。桃井若狭之助。塩冶判官。加古川本藏。鷺坂伴内。大星由良之助。斧九太夫。石堂右馬之丞。山名次郎左エ门。斧定九郎。早野勘平。千崎弥五郎。不破數右エ门。一文字屋才兵衛。せげん源六。狸の角兵衛。おかる。母おかや。寺岡平右エ门。大鷲文吾。大切浄瑠理〔東花一座顔見世〕ふ平親王将门ゟ打連幸右エ门。毎日替りハ初めて故世间一般の評判とな

ずし桟舗の切手を五日分ヅヽ續けて求める人などありて暮に似合ぞ
大入なかで殊に浄瑠理ハ三都の顔見勢にて京の八乙女大坂の
手打江戸と吵ひし昔しにハ毎年ありし暫くを久しぶりにて
勤めしハ芝居好事の御連中ハ手を打て悦びたり○明治十二
乙卯年一月〔毎日替の忠臣藏〕大切三都の浄瑠理を預り〔積戀雪關
扉〕に良峯の宗貞關守関兵衛実ハ大伴の黒主。墨染櫻の精やあり
三役を毎日替りに勤む○同年二月〔赤松滿祐梅白籏〕に赤松五
郎教康中幕〔勸進帳〕二番目〔人間萬事金世中〕に恵府林之助。大
切浄瑠理〔艶花春色音黄鳥〕に日分貸爲のかゝの抔二番目の金の
世中へ西洋の演劇を池の端乃先生より承りしを其侭に彼地
の事を日本乃横濱の事になせしが腹を抱へる笑しさ有りて



狂言の評もよく海岸の場乃灯入の月へ時く雲の掛る仕掛ハ
梅幸乃好みにて月の評能きゆゑに此場へ一層光りを増した
り○同年五月〔綴合於傳假名書〕に波之助女房玉橋お傳。人力車
素走の虎吉。中幕〔花洛中山城名所〕に水戸宰相。大切〔昔綉廓鞘當〕
鳶の者彫物連治。玉橋於傳ハおもなり役にて始へ万端申分なく
中にも丸竹の二階の場へ新内ながしの明烏延壽太夫の獨吟を
殺しの件へあしらひしハ古き趣向も新らしく此場が一の佳評なり
○同年九月〔源平布引滝〕〔漂流奇談西洋劇〕奥州旅行中にて
出勤なし○同年十月〔鏡山錦栬葉〕に大月源藏後に大月藏人。浦
井の若徒曽平次。大切浄瑠理〔中宵宮五人俠客〕に男達根岸の松
右エ門。此大月源藏ハ色気のある立敵にて當時梅幸に限る役故

幕毎に評判よく大詰隻牢の場乃立腹ハ祖父傳來の申分なく
居所替りに三上山から湯嶌乃祭りの道具になり五人男ハ花やかの
ふく打出し際に評判よし〇明治十三庚辰年一月〔御存白石噺〕
に与茂作娘おのぶ。昨年の奥州行ゟ宮城野信夫の事跡を尋ね
だしやがまアの実地を聞きせりふに余程用ひられたる中幕〔桃山
譚〕二番目〔劇春霞網嶋〕〔滑稽膝栗毛〕にハ出勤なし〇同年三月〔日
本晴伊賀復讐〕に沢井又五郎。町奴夢の市藏。大切所作事〔六歌仙
狂画墨塗〕に喜撰法師。一番目の伊賀越ハ御家と世話の裏表に
て備前町に名も高く上ヶ羽の蝶乃定紋に夢と異名の市藏が癪
の病に半兵衛より貰ひし薬が毒薬にて無念に苦しむ幕切迄
かやうな役ハ得意の者申分なく大出来なり〇同年六月〔星月夜



見聞實記〕に由利八郎惟久。古郡新左エ門保忠。二番目〔霜夜鐘十
字辻筮〕に査官杉田薫。大切浄瑠理〔首尾四谷色大山〕に大山参り
兼松。一番目の星月夜ゟ由利八郎の邸内へ泉の小次郎親平が同
士をかたらひ切込みし昔摸様を今にうつし目前を替て仕ら進しハ
毎度ながら感心せり又霜夜鐘の杉田薫ハきのふ乃吏をけふ見る
如く巡査の職務を尽されて世評の能きハ狂言を仕活させし故
なるべし〇同年十一月〔茶臼山凱歌陣立〕に木村長門守重成。今錯
人加藤弥平次。二番目〔木間星箱根鹿笛〕に海老屋の娼妓おさよ
実ハ九郎兵衛女房おさよ。葉茶屋岩淵与七。二番目の娼妓おさ
よハ士族の娘の以前が見へ箱根山で夫に殺され後九郎兵衛
が神經病で我のみ見ゆる開化の幽灵他へ見へぬのが猶もよく

壁へぼんやり消るのハ人手を遣ハバ奇々妙々又与七が兄の悪業に困る内ニも兄弟の実意の见ゆるハ感心なり○明治十四辛巳年一月〔松梅雪花三吉野〕に菅原の道実公。後室覚壽。判官代照國。宿根太郎土師の兵衛。偽迎ひ弥藤次。舎人松王丸。同梅王丸。同櫻丸。氏原の時平。武部源蔵。春藤玄蕃。よだれくり与太郎。いがみの権太。主馬の小金吾。鮨屋弥左エ门。同弥助。梶原平三景時。佐藤忠信。源九郎狐。源の義經。返り坂の薬因坊。横川の覚範。先年の忠臣蔵にあつらひ何れも毎日替りニ勤む同年三月〔天衣紛上野初花〕ニ御家人片岡直次郎。櫻井新吾実ハ直次郎。札差伊勢屋清三郎実ハ直次郎。中幕〔千代誉松山美談〕ニ役なし通し狂言の直次郎ハ打て附のあたり役ゆゑ出る幕毎ニ仇矢なく中れも的の大當



殊ハ入谷田甫の立廻り道具の好々鳴物の誂へがよく佳評なるも降り積む雪よりも年功を殷く積し故なるべし

○當五月狂言より梅暦君の厚意を仰ぎ千代見草の跡を嗣ぎ壽き長れ菊の栄えを年を重ねて次編と為し再び愛顧の諸君子へ一小冊を配呈なさんと梅幸贔負の魁ある素行笠阿彌老人が催主と為りて己も又次編の筆者をあたへらるゝ

こゝろし亡父か三十三回忌にあたれは法界のため
たからくらをひらきし玉章を梓にのこすなるか
あしはおのれかそれを見て辞書いてし
なきかすにいりけるとしか修行のため役
をさへてけり千代見草といへるさうしを
さる異の役人らきゝしをよみ合せし人々の
思ひてきゝるものにもおのれはすゝめのひも
なりけり字のこかうしを事なかれかついなみやもし

千代見草 尾

かゝる人の遺言にまかせ好むみちをもてあそ
たゞ偏に家の行ひなりかつまた僧たる大役を
つとめしするを己がつとめしなす故に梅寿居士とかう
よくも慰め孝養のたよりもなきあとにてなほきめ
たまふその身はあまりて何のくるしきこともなし
祖父の恩をおもふなることを祝ふにつけて何ごとのま
をしたゝめ

三世 庵之梅寿